



近江の寺院客殿

はじめに

私達の祖先が土間をおもな生活の場としていた居住形態は現在でも農山村にその名残りを留めており、江戸時代に発達を見た農家の間取りは現代和風住宅にも影響が強く、そこにはまた書院造の要素が沢山に入っています。例えば、座敷には床、違棚、付書院、縁などがあり、間仕切には襖や明障子、欄間などを設け、畳を敷きつめて

落ちついたふんい気をつくり、高級な家では立派な玄関を構えています。このような住宅はわが国の永い歴史の中で日本人の文化意識と生活の智慧によって作られたすばらしい文化財であります。文化が相当高度に発達した平安時代の貴族は寝殿造といわれる立派な邸宅に住みました。広い敷地に沢山の建物を建て、庭には池を掘り、山を築き、石を組み、

滋賀県下所在客殿建築一覧表

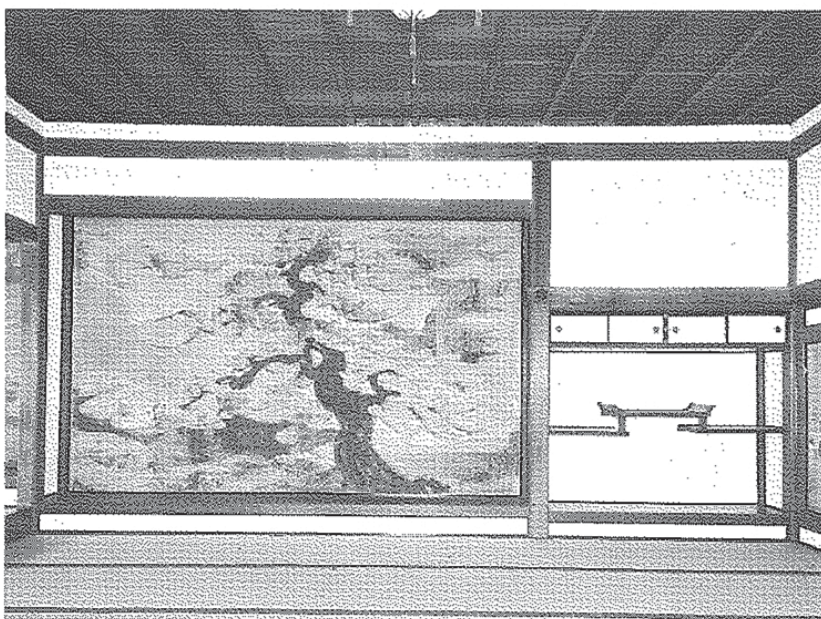
◎国宝 ◎重要文化財 ○市指定文化財

指定別	名称	所在地	建造年代
◎	西教寺客殿	大津市坂本本町	慶長3(1598)か
◎	勸学院客殿	// 園城寺町	慶長5(1600)
◎	光浄院客殿	// //	慶長6(1601)
○	盛安寺客殿	// 坂本本町	江戸前期
◎	圓滿院宸殿	// 園城寺町	//
◎	聖衆来迎寺客殿	// 比叡辻	寛永16(1639)
◎	大通寺客室	長浜市元浜町	含山軒(江戸前期) 蘭亭 宝暦5(1755)
◎	観音寺書院	草津市芦浦町	江戸前期か

木を植え、自然を借景とした庭を作り、庭に面して寝殿を建て、寝殿内には公式の儀式を行う部屋、接客の部屋及び日常生活に用いる部屋などがありました。寝殿造を現実に見ることはできませんが、貴族社会が封建社会になり、寝殿造は武家造、主殿造あるいは書院造の完成へと、その要素を持続し発展し、今私たちは京都御所内の建物、二条城の御殿、

醍醐寺三宝院表書院、本願寺の書院、あるいは以下に説明する客殿などからその発達した様子を勉強することができますし、日本建築の接客の為の施設、壁や建具の装飾性、庭園と一体になったすばらしい環境などをゆっくり観賞し、そこに住んだ人々の優雅な生活を想像することも可能でしょう。

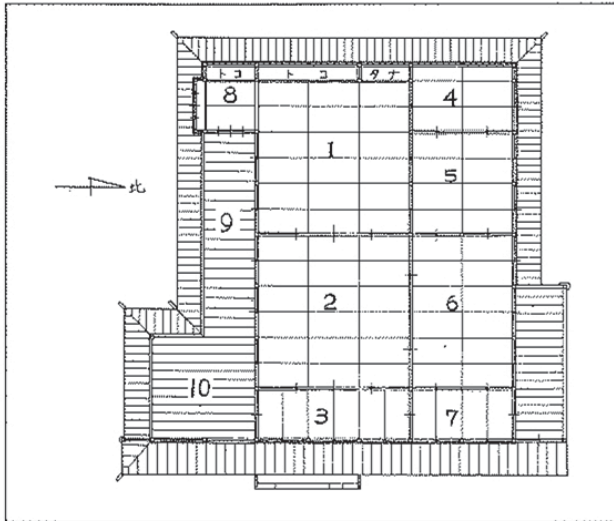
ここでは県下の寺院内にあって、重要文化財などに指定されている客殿建築の一覧表をかかげ、その内の二三について説明します。



光浄院客殿の大床及び違棚

光浄院客殿

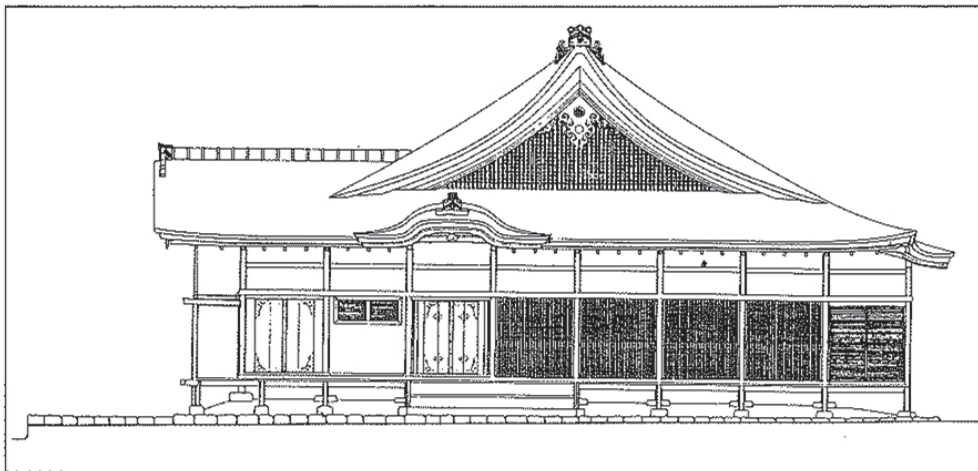
光浄院は園城寺金堂の後方にあり、門と塀を構えた中に、客殿は東妻を正面として建っています。四脚門を入ると客殿東妻の車寄に歩を進めることになり、客殿の南側から西側にかけて池泉観賞式の庭園があり、この庭は



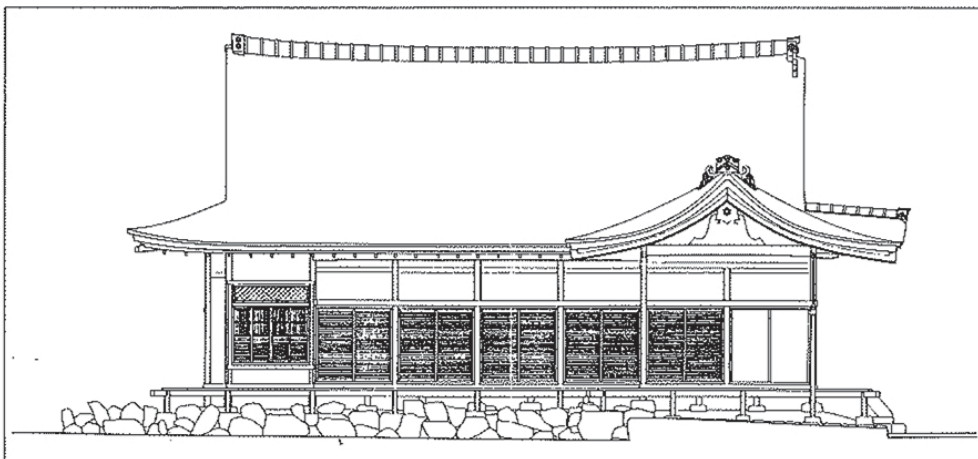
光浄院客殿平面図

名勝に指定されています（シリーズ35光浄院庭園を参照してください）。車寄の階段の上は軒の一部を反転曲線に作り（軒唐破風）、客人の入口らしくなっています。内部の間取りはまず平面図を見てください。南側（庭園側）と北側の2列の部屋の東側に南北に長い狭屋の間（3と7）を配し、南側は東端にほぼ正方形平面の中門（10）、それに広縁（9）を続け、広縁の西端には主室（1）から突出した形に上段（床が一段高い）二畳間（8）があります。これらの外側をとりまいて四面に落縁（一段低くなった濡縁）がついています。

屋根は東西方向に棟があって両方の妻が入母屋造で木連格子となり、破風には三花懸魚をつけ、その両側に彫刻を飾っています。中門は切妻を南に向けて南北方向の棟が大屋根に取付いています。東側の建具は中門の部分が両開きの板扉と横連子の窓、軒唐破風のつ



光浄院客殿正面(東面)図



光浄院客殿南面図

いた車寄の間が両開板扉、それから北へ薮戸が四間続いて北端の間は舞良戸引違いになっています。この薮戸は上下二枚になっており、上の戸は上端が吊元になって外側へはね上げて開くと窓の形に開口部ができ、下の戸も取れば出入りのできる大きな開口部ができるもので、平安時代以来宮殿や住宅に用いられ、板扉とともに仏堂にも用いられてきました。この東側から見た変化に富んだ屋根の構成や建具の配列、建具の上部の白壁を区画するかに見える柱や化粧貫など、見事な建築美を作

りだしています。南側に回ると、庭園に面した中門と広縁は深い軒が僅かな数の柱で支えられ、落縁と続いて庭と一体になり、実にゆったりとした空間を作っています。広縁と1、2の部屋を区切る建具は横舞良戸（細い棧を横方向に並べ、板張りとした戸）を引違いとし、その内側に明障子を建て、室内に入る光線の量を加減することができるものです。東端の間は杉戸（杉の一枚板の周囲に黒漆塗の棧を廻した戸）を引違いに建て、それには唐獅子を描いています。1の部屋は十八畳で正面（西側）に畳二枚長さの大きな床、その北隣は高さ中程に違棚を、その上部に小襖四枚を建てた天袋、西南二畳敷の上段の間は西側に床、南側に付書院を作り、東側は腰高障子四本引違いになっています。北側は西から畳巾四枚分を畳より高いところに敷居を入れ、襖四枚建てとした重厚な構えを作っています。これを帳台構（とけだまがま）といって、寝殿造の時代、部屋の中に囲いを作り、帳を垂らして寝所としたものが固定化されたものともいわれますが、簡単に言えば納戸、あるいは寝室への入口で、最上級の部屋側を豪華に見せる装飾性の強い間仕切装置です。光浄院ではこの中央柱が北側の部屋（4と5）の間仕切の角柱になり、襖は中央の西一本が動くのみで、その他は壁になっており、一層装飾的要素になっていますし、その北側が4と5の二部屋になっているのも他の例から特異といわれています。

客殿内部の障壁を飾る絵画は一部を失っていますが、1の間の大床は金地著色松に滝図、8の間は金地著色菊花図、1～2の間の襖などに墨画列仙図、著色

花鳥図、3の間の杉戸に著色唐獅子図と松梅図が描かれ、これらは慶長6年(1601)再建とされる客殿と同時期の絵画で、桃山時代の豪華な趣を見ることができます。

勸学院客殿

勸学院も園城寺子院の一つで、金堂正面参道の西側に高い石垣と白壁の塀に囲まれて客殿と庫裡が建っています。客殿は建物部材から「慶長五年五月廿九日時奉行云々」の墨書が発見され、園城寺慶長復興建築の一つであることが明らかです。外観は光浄院客殿と殆ど同じように見えますが、広縁の西端に上段の間がなく、東側狭屋の間の北寄り（平面図の10）が吹放ちとなって、その入側の建具を舞良戸にしている点などが相違しています。建築面積も大きく、光浄院の二列配室に対し、三列に部屋を並べ、1の間は正面一杯の大床とし、棚や帳台構はありません。中央列の西端4の間には北側に床、西側に付書院を、北側列の西端7の間に押入れと床を設けるなど各列西端の間はそれぞれ特徴があります。平面図により光浄院客殿との相違点を見てください。床壁の裏板から寛政11年(1799)の墨書が発見され、それは「当院は豊臣秀頼の建立、毛利輝元が奉行となって慶長五年四月十日に

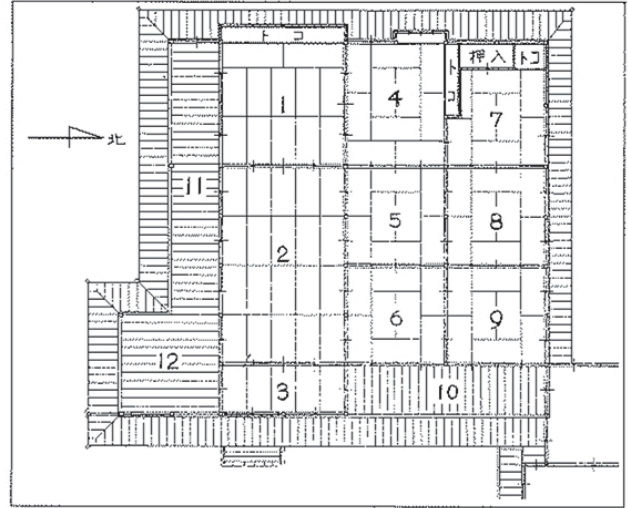


勸学院客殿正面(東面)

立柱、両間は狩野光信筆、以来二百年に及び張替修覆を行った。表具師は松村久兵衛知新、常住探題前大僧正親剛」という意味のもので、1の間大床の金地著色滝図、襖の金地著色花卉図、2の間の著色松竹鳥図、3の間杉戸の著色唐獅子図及び牡丹に猫の図などは光信（1561～1608）の筆と見られています。第二列及び第三列の間（4～9）はすべて水墨画で、筆者の名前は不明ですが、江戸時代中頃、やはり狩野派の絵と見られています。これらの間仕切建具をすべて取外すとこの客殿は大きな部屋空間を作り、大勢の人の集会などでもできる建築であることが理解されます。

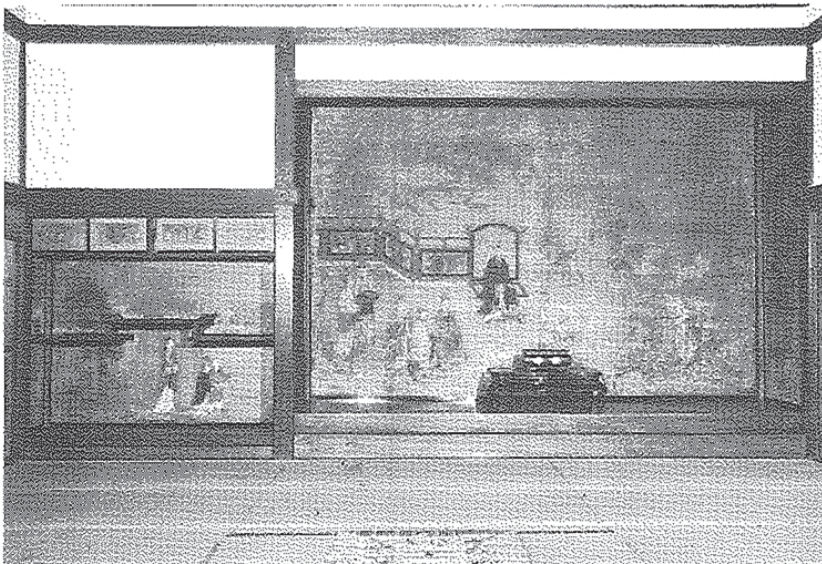
西教寺客殿

客殿は本堂の西に東側を正面にして建ち、柿葺の屋根は南妻を入母屋造、北妻は切妻造になっています。本堂から渡廊下を通過して客殿の東側広縁の北端部に入りますと、この広縁は東側から南側に廻り、それには落縁がついています。平面図に見るように表向きの部屋は1の上座の間から6の控の間までです。1から4までの4室はいずれも十八畳敷きの広い部屋がつらなり、「上座の間」は畳長さ2枚分の大きな床とその南に棚があり、棚は中央の棚板を高くした西棧棚で、その上部には小襖4枚を引違いとした天袋があります。床框や棚の間の地板下には蹴込板を入れた古



勸学院客殿平面図

式であり、これは光浄院客殿などと共通しています。また床の位置が縁寄りでないことについて、近藤豊博士は「これは古式をよく伝えているところで、床は本来仏画をかけ、花を供えたりする処などから来たとする『床の間仏教起原説』に従えば端近の縁の方でなく、当然室内の奥に取られるべきである」といわれており、この配置は盛安寺客殿も同様であります。1から5の間までの障壁画について説明しましょう。1の間は著色の帝鑑図、2から5までの部屋はそれぞれ襖絵の画題により部屋の名前がついており、2の「花鳥の間」は著色画で松竹梅に牡丹や芙蓉を添えて鶴、雉、鴛鴦などを描き、3の「賢人の間」は水墨画で竹林七賢人、琴棋書画の図、4の「猿猴の間」は淡墨を主調として岩や柳の木の上に遊ぶ猿が描かれ、5の「鶴の間」は地上に群る鶴あるいは海上を飛翔する鶴が著色で鮮やかに描かれています。広縁には三個所に杉戸を引違いに建て、同所の落縁には脇障子を作り、それぞれ上部に竹の節欄間を設け、杉戸には著色画で竹に猛虎、桐に鳳凰などを描いています。これらの筆者は明らかではありませんが、磯博氏は「近江の障壁画」（京都書院刊）の解説で十七世紀初期の狩



西教寺客殿上座の間正面

野派の筆と見られています。これらの間仕切建具をすべて取外すとこの客殿は大きな部屋空間を作り、大勢の人の集会などでもできる建築であることが理解されます。

野派の画人で古い様式を忠実に学んだ人の絵であろうとされております。

賢人の間(3)の西奥に内仏の間(13)を設け、3の間東側(広縁との境)に棧唐戸を両開きに吊込んでいるのは、3の間が内仏の礼拝室になることを強調したもので、この配置は京都に沢山の例がある禅宗寺院の方丈建築と共通するものです

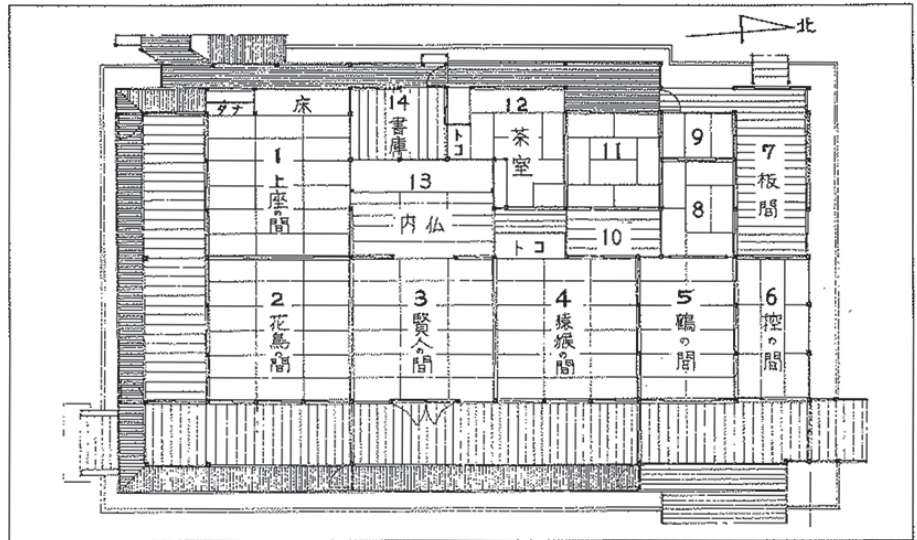
(盛安寺客殿は棧唐戸ではありませんが、聖衆来迎寺客殿と共に同じ配置です)。内仏の部屋の北に連なる部屋は当初の建物から模様替えが行われたことが考えられ、茶室内部も独特の構成をしています。

この客殿の建築年代については寺蔵の棟札によれば、慶長3年(1598)の建立とされ、また伏見城(最初の指月城)の殿舎を移築したものとも言われ、あるいは天正17年(1589)豊臣秀吉が復興したもの、などの諸説がありますが、確定的なことは今後の研究にまかすところです。

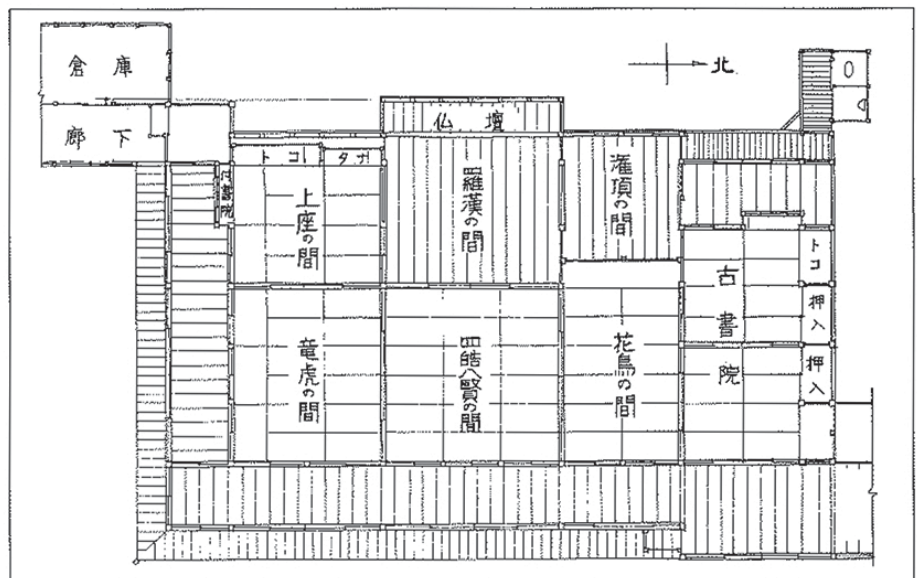
大通寺客室

(含山軒及び蘭亭)

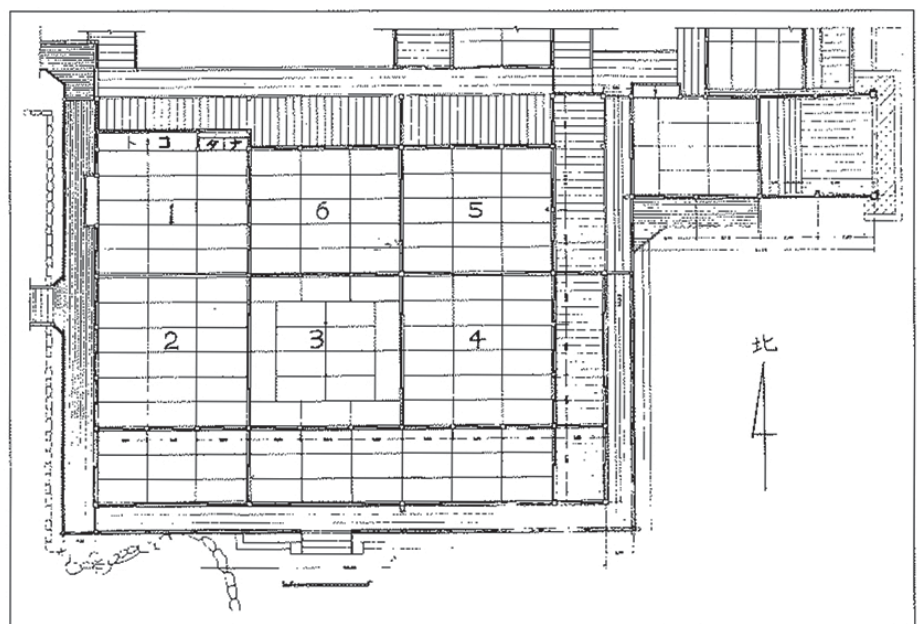
大通寺は真宗大谷派本願寺(東本願寺)の長浜別院で、通称「長浜御坊」と呼ばれ、広大な敷地内に東から本堂、広間及び台所がそれぞれ南面して並び建ち、広間の背面(北側)に新御



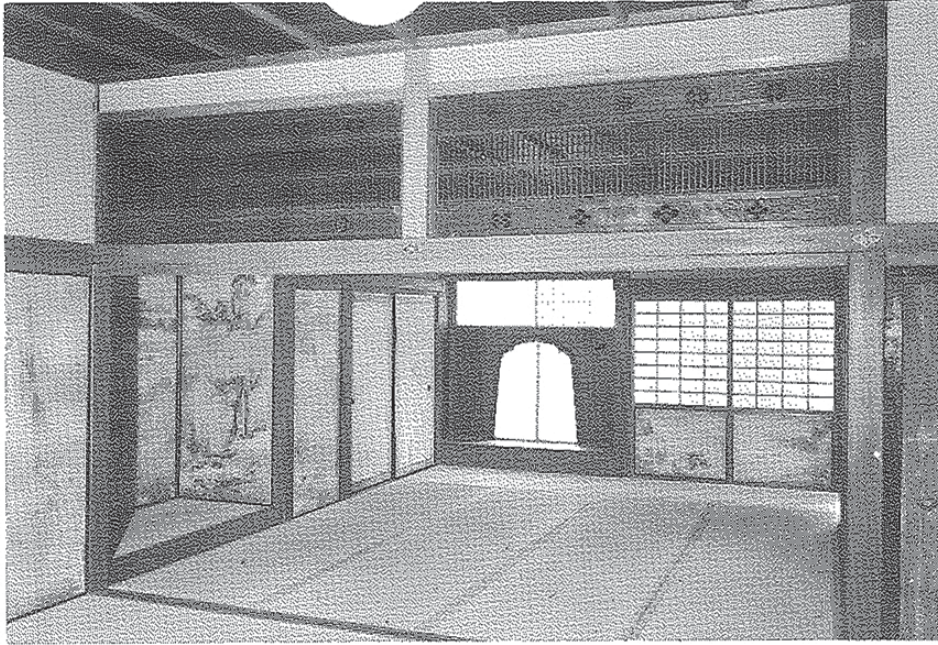
西教寺客殿平面図



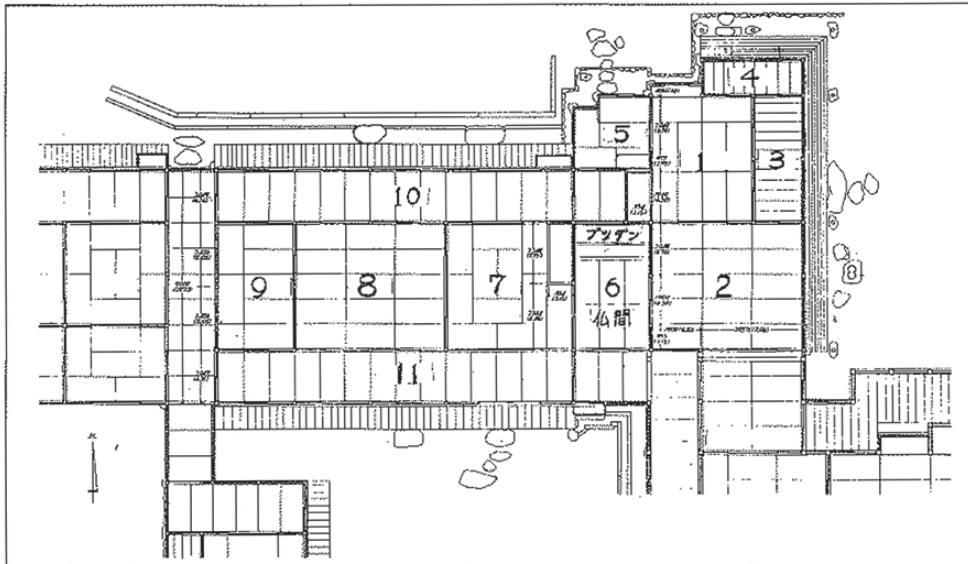
聖衆来迎寺客殿平面図



圓満院宸殿平面図



大通寺客室 含山軒の内部



大通寺客室(含山軒及び蘭亭)平面図

座と呼ぶ御殿があり、その北西隅に続いて含山軒が東向きに建ち、蘭亭は含山軒の背面（西側）に接続して建っています。含山軒は江戸時代前期の建物と考えられ、蘭亭は宝暦5年(1755)の建造であることが明らかになっております。

含山軒は平面図の1の間十畳^{とこ}に床と花頭窓の付書院がつき、東側と北側に床板張りの狭屋の間(3・4)が続き、西隣に茶室(5)があります。2の間は十五畳敷きで、これらの間の東側から北側に廻る土庇^{つちか}があって庭に面し、この庭は遙か東方の伊吹山を借景にしていま

す。床の壁や襖は水墨画や著色画によって装飾されていますが、水墨画は狩野山楽(1559～1635)とその養子山雪(1590～1651)の二人の筆になるものといわれております。天井はすべて棹縁^{さし}天井で、1の間と2の間境の^は箄欄間の上下の板に透彫の文様を入れた意匠や花頭窓の曲線の美しさなど味のあるものです。この建物は前出の光浄院や勧学院の客殿などに比較すれば規模も小さく、障壁画も落ちついたもので枯淡な風趣を楽しむことができます。

含山軒の西側に仏間(6)をはさんで蘭亭が続いています。蘭亭は東端の間(7)が十一畳で床があり、次の間(8)が十五畳、西端の間(9)は七畳半で、これら三室の北側と南側にそれぞれ十四畳の狭屋の間(10・11)があり濡縁がついています。南面の庭は含山軒の庭と共に名勝に指定されています。この建物は至って明解な平面構成ですが、襖には中国の故事「蘭亭曲水の宴」の図を描いており、蘭亭の名はこれからつけられたもので、まことに詩情豊かなものです。この絵は寺伝に圓山応挙(1733～1795)の筆といわれております。なお床脇には花狭間菱格子を三角形に入れ、古来の文様を斬新に扱って視点を作っています。

(成瀬弘明氏提供)